法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

笑いの集団維持機能

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
99
(開始ページ / Start Page)
299
(終了ページ / End Page)
313
(発行年 / Year)
1997-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004773

Hosei University Repository

《研究ノート》

笑いの集団維持機能

江　村　裕　文

教養ゼミ「異文化間コミュニケーション論」では，1994年5月6日から7日にかけて八王子の大学セミナーハウスで合宿を行ったが，その前の数回の授業及びこの合宿を通じて「日本人」を考える上で有用と思われる一つのアイデアを得た。本稿ではそれについて紹介したい。討論に参加してくれた留学生，日本人学生に感謝し，この小論がさらなる議論のきっかけになるよう願っている。

Ⅰ．合宿の日程およびコンパについて

5月の6日・7日というと，いわゆるゴールデンウイークの直後，ある人にとってはまだゴールデンウイークの最中のことでもあり，また授業が始まって間もないということで，どうしてこんな早い時期に合宿を行ったのか，ということについてまず述べておく必要があるだろう。

教養ゼミの「異文化間コミュニケーション論」は，1993年度から教養課程の一般教育科目の枠に新設された科目である。この科目設置のコンセプト，並びに93年度のこの科目の運営や問題点等についてはすでに以前まとめておいた[1]ので，詳しくはそちらを参照してもらうとして，ここでは次のいくつかのポイントだけをあげておく。

1993年度の反省にたって1994年度に心がけたことは，

(1)　受講者数をしぼること

(2)　今年の目玉である夏の韓国合宿に向けて早めに準備すること

(3)　そのためには学生の自主性に期待するのではなくて，教員の側でかなり積極的に合宿やコンパ等を計画し，奔走（？）すること

等であった。

そこで第一回目の合宿ということになるのだが，1993年度は夏休みに計画したのだが，1994年の場合はそれではとてもじゃないが間にあわない，遅く

Hosei University Repository

とも連休明けには実施すべきであると考え，私があらかじめ場所および日程を決め，だいたいの人数で仮に申し込みをしておくということまですべて準備し，第一回目の授業のときにこの合宿についてアナウンスし参加者を募るという形にし，それはそれで順調に運んだわけだが，その折にゼミの中心となって連絡役をしてくれる日本人学生を二人お願いした。これが何故日本人なのか，という点について述べれば，私からすれば留学生のほうが頼みやすくまた期待しやすいということがあるのだが，日本の大学のゼミで中心的に動くのが留学生というのは話がおかしいのではないか，と思ったことによる。極端な話，留学生が中心になって動き，日本人学生は何もしないで言われるままに参加だけするというのはどう考えてもおかしいというのは異論がないだろう。ともかく三年生二人に私の考えていることを話したところ，意図をよくくんでくれて，そういうことなら連休前に一度コンパをしておいたほうがいいですね，と提案してくれた。この提案をしてくれた学生はそのコンパで重要な役割を演ずることになるのだが，そのことには後で詳しく触れることにする。というわけで，連休に入る週，つまりこの第一回目の授業のあった週の次の週にコンパをすることになった。

4月25日月曜日，コンパ当日，我々は午後5時半に新宿駅南口に集合して会場である「庄や」に向かった。以前から肝臓をいためていることもあって，私自身はビールを含めアルコール類は一切口にしないため，最初の乾杯はウーロン茶で，ということになる。参加した学生たちはそれぞれビールやサワーなど好きなものを頼んで乾杯したが，私自身これは非常にいいことだと感じていた。というのは，こういったいわゆる飲み会の場合，どうも先輩が一年生に特に無理強いしてお酒なりビールを飲ませ，飲まないとグループの一員として認めないというような習慣があることを，私自身は苦々しく思っており，93年度のゼミ合宿でも，そうしてある程度お互いに飲んだり馬鹿をやったところでやっと本論の話に入るという儀式にとらわれている学生がいて，苦労したことがあったからである。そのような「変な伝統」にとらわれている学生によると，「しみじみと本音で」語り合うのはかなり飲んだ後，つまり飲み疲れてからというのが本当だというのである。お互いの親交を深めあうという目的のために，一気飲みに代表されるような方法で，新入生に無理して飲ませるという通過儀礼が必要なのかどうか，またそういう枠にとらわれないということがどういうことか，等々といったことそれ自体を問題にするのが目的の合宿におい

Hosei University Repository

てさえもそうであるのだから，日本人的な行動に対して一人で異論を唱えるのがいかに勇気がいりまたそうすることが困難であるかがわかる[2]。

さて，ただ食べたり飲んだりしているだけでは会は進まないので，一応全員が一人ずつ自己紹介をし，また自分が何故このゼミをとろうとしたのかということについて語ってもらった。ただ外国人の友人ができればいいと思って来たという人もいれば，高校生時代に四年以上もカナダで生活していた経験があるという人まで，いろいろな話が聞けて興味深かったが，そのとき私の注意を引いたのが次のような出来事だった。

先に，早くコンパをしましょうと言ってくれた三年生のことに触れたが，彼が自分のことを語ったとき，そこにいた日本人学生と中国人留学生のほとんどが同時に同じ反応を示したことがあったのだ。彼はこの三月まで中国の地方都市に中国語の勉強のために滞在していたため，この二年間の日本に関する情報が全く抜けていたのである。例えばその年二年目になるＪリーグについても何ら情報がなく，帰ってきてみると，銀行へ行ってもＪリーグ，コーラを買ってもＪリーグ，日本国中まさにＪリーグだらけで，これは一体何なのだと思ったと感想を述べていたが，この話に座は大いに盛り上がり，じゃこんな歌手は知っているか，こんな歌が流行っているよと，みんなは彼が知らないことを次々に指摘して，彼が知らないということを理由に，「浦島太郎」という名前まで出して，彼を笑い物にしたのだった。

後で授業のときに彼本人に聞いてみると，そのときには，まあ飲み会でもあるし，自分がピエロになることで座が白けないのならまあしかたがないかな，というふうに思っていたそうである。本人はそれほど真剣にみんなから受けた仕打ちについて考えていないようだったが，これが文化の違う外国人の場合ならどうだろうかと思わされた。そんなに簡単にみんなの笑いを聞き流すことができるのだろうかと。

私がそんなことを考えたのには理由がある。私は留学生に対する日本語の授業もいくつか担当しているが，水曜日の２限目に法学部・文学部の一年生を対象にした作文の授業がある。このコンパの話からすると時間的には数日逆上ることになるが，４月 20 日の水曜日の授業のときに同じようなことがあったのである。

そのクラスは三分の二が韓国の留学生，残りの三分の一が中国の留学生というクラスであるが，そこに交換留学生としてオーストラリアから来ている留学

Hosei University Repository

生も一人入っていた。彼のことは仮にRとしておこう。一般の留学生は日本語能力試験の一級がないと入学できないという試験をクリアーしているが，その彼らと比べると交換留学生として来たRは少々日本語の力に差があるということもあるのだが，その日，順に当ててテキストを読んでもらっていたとき，彼が漢字の読み方がわからなくて間違ったのである。そのとき，クラスの全員が彼に対して笑ったのである。それは馬鹿にした笑いというよりももっと優しい笑いであったかもわからない。しかし，Rはその笑われたことを非常に気にしたのである。その週の土曜日の「日本事情」の時間のことであったが，彼と同様にオーストラリアからの交換留学生として来ているもう一人の留学生，彼女を仮にVとしておこう，私はVから，Rがそのときみんながどうして笑ったのかわからなくて不思議に思ったと言っていた，ということを聞いたのである。自分の日本語はまだそれほど上達していない。だからまだまだわからない漢字もあって当然だ，と思っているRにとって，クラスで笑われたことはショックだったのであろう。

こういうことがあったため，ゼミのコンパの席で，当然日本にいなかったのだから知らないのが当たり前のことについて，知っているのが当たり前という扱いを受けて笑われている彼の姿を見て，私はオーストラリアからの交換留学生のRのことを思い出していたのである。

Ⅱ．常識について

「常識」ということばは，それは何かと改めて聞きなおすことが「常識外れ」であるほど，一般的なことばであろう。しかし上に述べてきた一連の出来事を通じて，問題にすべきはこの「常識」とは何かということではないかとの思いにとらわれはじめた。

辞書をわざわざ引いてみるまでもなく，誰でも質問されたら，「常識」というのは，デカルトが「方法序説」で展開したような，すべての人間に与えられているはずの理性，言い換えれば，人間ならば当然持っている合理的な考え方の筋道のことという意味を答えるであろう。これはとりもなおさず英語の「common-sence」のことである。では日本語の「常識」と英語の「common-sence」とは同じなのか違うのか。「日本事情」の時間等にこれをテーマにして考えてみたが，英語を母語としている留学生との議論をまとめると，英

Hosei University Repository

語の「common-sence」とは，人間の mind の function の一つであり，話の筋道が logical かどうということにかかわる概念，つまり inteligence の問題ではなくて intelectual かどうかという問題であるという一応の結論に達した。英語の「common-sence」の意義分析がここでの目的ではないから，これくらいのラフなスケッチで当面はことたりるであろう[3]。

さて，ここで日本語の「常識」に戻ってみよう。今述べた英語の「common-sence」の意味で「常識」が意識されることもないではない。しかし，Ｉで述べたような，笑いの対象となる，というテーマに関して言うと，笑われるのは「常識」がないからだ，という言い方がされることに気がつくのである。Ｉであげた二つの例のうち，第一番目の例では，Ｊリーグ，つまり日本のサッカーのことを知らないという理由で笑われた，すなわち，Ｊリーグという「常識」がないといって笑われたわけであり，第二番目の例では，漢字の読み方を知らないといって笑われた，すなわち，ある漢字の読み方という「常識」がないからといって笑われたわけである。第一の例の場合，本人は中国に行っていて日本の情報から離れていたために当然知らなかったわけであり，「common-sence」から言えば，知らないのが当たり前，その当たり前のことをどうして笑うのかということになる。第二の例の場合，本人はまだ日本語学習の途中であり，まだまだ文法的にも語彙的にも漢字についても知らない知識があるのは当然である。にもかかわらず，漢字の読み方を知らないと言って笑うのは「common-sence」から外れた行為ではないか，ということになるはずである。

ここまでのことを踏まえてまとめれば，日本語では「常識」の「識」は「知識」の意味で使われているということになるのではないか。つまり，さらにまとめれば，日本語の「常識」には二つの意味・用法があり，一つは英語の「common-sence」にだいたい相当する表現であり，もう一つは「一般的な知識」という表現である。

常　識
- ①　= common-sence
- ②　一般的な知識 = みんなが知っていて知らないとおかしい知識

ここで「一般的な知識」といったのは，地球上の人間全体とか日本人全体と

Hosei University Repository

かといった意味での「一般」ではない。あるグループがグループとしてまとまっているときに，そのグループの成員であれば当然知っているはずの知識とでもいうような意味での「一般」である。だからこそ，「お前は我々の仲間にしては変だ」という意味で「お前は常識がない」という表現が使えるわけで，これは「お前はみんなが知っていることを知らない」という意味で「変だ」と言っていることに他ならないのである。

Ⅲ．「常識」がないといって笑われるということについて

「お前はみんなが知っていることを知らない」から，その点において「みんなから外れている」「常識がない」という形である個人を笑い物にするという行為は，これまで見てきたように，日本人のグループによく見られる行為であり，ここで「常識」と呼んでいるのは英語でいうところの「common-sence」とは全く異なった，「（そのグループ内では）みんなが知っている知識」という意味であるということを見てきたが，この行為の持っている機能は何かということについて考えてみたい。

ある個人が，みんなが知っている（はずの）ことを知らない，という理由で笑われる，というのは，簡単に言えば一種の「いじめ」に他ならない。この「常識」のなさを理由にした「いじめ」の例は宮本政於の著作の中にも見られる。宮本政於は『お役所の掟』の中でこんな「いじめ」の例をあげている[4]。

> 新しい環境では，知らないことがたくさんある。ある日，自治省に書類を持って行ってくれとたのまれた。そもそも米国の大学で教鞭をとり，メンタルヘルスではスペシャリストと自負していた私。だからこそ中途採用をしたはずなのに，それがカンに触るらしい。その結果，与えられるのは使い走りとかコピー取りなど，専門分野とはかけ離れた仕事ばかり。たしかに下積み経験もないまま魅力あるポストに落下傘降下した私に対して，やっかみが出るのもわかるが，いじめられる側としてはたまったものではない。
>
> ここは我慢のしどころと思ったが，なにしろ11年間も日本を留守にしていた私だ。目と鼻の先にある自治省の場所がわからない。そこで，
>
> 「自治省はどこにありますか」

Hosei University Repository

と聞いた。すると，このボス然とした男が大きな声で，隣の課に聞こえるように，

「宮本さんは外国帰りでなにも知らない。ほんとうに迷惑ばっかりかける」

まわりは，それを聞いてどっと笑う。

意地悪で有名な彼のしっぺ返しを恐れてか，だれも自治省の場所を教えてくれないのだ。なんという意気地なしな集団だと腹が立ったが，それならそれで自分で調べようと，番号案内に電話を入れた。すると今度は，

「なんで，電話番号なんか必要なんだ」

と文句を言う。

「自治省に電話して，場所を教えてもらうのですよ」

と言うと，今度は，

「そんなことで，電話を使うな」

と，意地悪に拍車をかけてくる。

（中略）

厚生省に入りたてのころ，会議が開かれた。その中で，「日医」という言葉が頻繁に使われた。どうやらこれはどこかの団体の名称を短縮したものだ，まではわかったのだが，意味はよくわからない。ところがこの言葉が会議のキーワードで，知っていないと話についていけない。

わからないことは躊躇せず聞くべき，との考えを持っている私，「日医ってなんですか」と聞いた。ところが，驚いたことに，みんな冷たい目で私のことを見る。「くだらないことを聞くな。せっかくの会議の進行に水をさす」との意向がありありと出ている。結局，会議が終ってから親切なある係長が，「宮本補佐，『日医』は日本医師会の略称なんですよ」と教えてくれた。だが，そのときのみんなの反応に驚いてしまい，萎縮してしまった私，それ以後，知らない言葉が出てきても，みんなの前では聞かないようになってしまった。

だが，同僚のこの対応，私が11年間いたアメリカとはこうも違うものかと考えさせられた。

私が住んでいたアメリカでは，知らないことはていねいに教えてくれる。日本に帰ってからの「みんなが知っているのだから，お前も知っているべきだ」「知らないお前が悪いのだ」という対応にはびっくりしたが，

Hosei University Repository

よくよく考えてみれば，知らないのは当たり前，それを馬鹿にするほうがおかしいのである。そこであるときから，「知らなくて当たり前，文句を言うお前たちのほうが非常識」と対応を変えるようにしたこの対応が驚くなかれ，「いじめ」から逃れる最良の手段であることを発見したのだった。

ここで宮本氏は，厚生省の彼が所属する課のメンバーのみんなが知っている（ことになっている）ことを知らない，という理由で笑われている。当然知っているわけがないという正当な理由がある，つまり宮本氏の場合は新たに厚生省に配属されたという現実があるわけで，それにもかかわらずそのことを知らないといってなじるのは実に幼稚で大人げない態度に見えるのだが，正にその幼稚で大人げない仕打ちを宮本氏は一種の「いじめ」として受けたことになる。これは，知っているはずのことを知らないこと，つまり「常識」のなさを理由にした「いじめ」の例に他ならない。

この宮本氏の例ほど露骨ではないが，日本人のグループ，というかそのメンバーがほぼ同じようなあるいはよく似た行動をとることは岩田龍子著の『日本の経営組織』の中にも見ることができる[5]。

今，私の脳裏には，そんな時代のささやかな想い出が甦ってくる。ある朝，この独身寮の坂道を同僚たちとワイワイガヤガヤ議論しながら，最寄の駅へと急いでいた。出勤途次のなごやかな風景である。

そのとき筆者はふと土手に咲いているつゆ草の花を見つけた。「オ。つゆ草が咲いている」と思わず声をあげると，このとき一緒に歩いていた七，八名の同僚たちが，いっせいにドッと笑った。「変なことを気にする奴だナ」とおかしそうにそのうちの一人が言い，皆またドッと笑い声をあげた。

まだサラリーマンの苦労を知らぬフレッシュマンたちであった。この時の彼らの気持は，ただひたすらに，駅へ，会社へ，そして輝かしい成功へと一直線につながっていたのである。「目的地」しか眼中にない彼らにとって，路傍につつましく咲くつゆ草などは「変なこと」でしかなかったのであろう。齢，五十路の峠を越えて，こうした日々のささやかな感動，その累積こそが人生だと思うようになった筆者にも，このときの若もの達の気持は，手にとるようにわかる。

Hosei University Repository

ここには，路傍に咲くつゆ草に気がついた筆者のことを回りのみんなが笑うという場面がある。ここでの笑いは，すでに述べたような，「いじめ」であるとか「仲間外れ」を目的とした笑い，というほどのことではないであろうが，しかし，みんなとは違う「変なこと」つまり常識外れに対してみんなが笑うという構造は共通している。

Ⅳ.「常識」がないと言って個人を笑うことの持つ機能
——合宿にて

こういう，当たり前に考えるならば理不尽としか言いようのない仕打ちをある特定の個人に対して行うことの意味は一体どこにあるのであろうか。それは，日本人が自分の所属するグループをまもろうとする，いわば「集団維持」とでもいえるような機能ではないかと考えられる。ある集団のメンバー同士がその集団に属していることをお互いに確認し，その集団の結束を強めるという目的のために，この「特定の個人を笑い物にする」「常識がないということを理由に個人をいじめる」ということが働いているのではないかというわけである。

表題にあげた「笑いの集団維持機能」というのは，「笑い」の持つこのような機能のことを指して使ったつもりである。この機能が日本人の日常的な生活の様々な分野で観察されるのではないかということを体験的に知るという機会が，八王子の大学セミナーハウスでの合宿においてあった。この合宿では，基本的には何でも好きなことをテーマにしてよいわけなのだが，だからと言って，さあ何でもいいから話しなさい，というわけにはいかないため，一応，話のきっかけのために二つの材料を用意しておいた。一つは直塚玲子著の『欧米人が沈黙するとき』で，これは，例えば「この間はどうも」とか「何もありませんが」とかといった，日本人が日常的に頻繁に使用する表現で，その意味というか意図が外国人，特に欧米人にとって違和感を覚えるような表現を取り上げ，その日本語の表現がどういうふうに外国人にとられるかという観点から分析した研究である。もう一つは，西田ひろ子著の『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』で，これは，ある日本語の表現をあげて，その表現が相手に対してどう伝わるかという問題点を分析するというのではなく，日本人とアメリカ人とが実際に接触し，会話を交わしている場面，しかも文化が違う

Hosei University Repository

ことによって誤解や摩擦が生ずるであろうと予想されるような場面を数多く設定して，その場面に登場する日本人およびアメリカ人について，日本人およびアメリカ人の学生がどのように反応するかを調査した研究である。直塚の研究が表現の分析であるのに対し，西田の場合は，場面および登場人物に対する評価の分析であるという点で，よりダイナミックなものと言える。以下にあげるのは「①引っ越しの挨拶」という場面である[6]。

〈アメリカで〉

島田夫人は，夫と共にミネアポリスにやってきた。アメリカには2年ほど滞在する予定である。ふたりは島田氏の会社の近くに家を借りた。今日，島田夫人は，日本からの土産物を持って近所の人達に引っ越しの挨拶に行くことにした。

島田夫人：はじめまして。島田真理と言います。通りの向こう側のれんが造りの家に引っ越してきました。

ジョーンズ夫人：あら，はじめまして。何かお手伝いすることがありましたら言ってください。

島田夫人：ありがとうございます。これつまらないものですが，日本から持ってきましたの。

ジョーンズ夫人：ありがとうございます。

この島田夫人の行動に対しては，「引っ越しの挨拶に手土産を持っていくのは日本だけであり，外国でも通じると思ったら大間違い」とか，「手土産を『つまらないものですが』と言って渡すことは相手を侮辱することになる」といった意見が日本側回答者の間では多く，全体の約半数が批判的であったが，米国側回答者では好意的な回答が多く，日本人が考えているほど日本人の行動が問題になっていないことがわかる，といった結論を出している。

合宿においては，直塚のあげている表現や西田のあげている場面をすべて網羅的に検討するという余裕はなかったため，取り上げてみると話題として議論になりそうだ，面白そうな話題だという観点から取捨選択したいくつかの表現や場面しか取り上げることができなかった。

さて，ここで問題にしたいのは，西田のあげている場面の一つで，日本の大学でアメリカ人の講師の授業を日本人学生が受けており，授業のあとでアメリカ人教師が「何か質問はありませんか」と聞いたときに，日本人学生が何も言

Hosei University Repository

わず黙っているという事例である[17]。

⑱授業態度――「何か質問は？」　〈日本で〉

シーリィ博士は日本のある大学の客員教授。今回は彼女が教鞭をとる初めての学期である。

シーリィ博士：これで西洋における論理と実証の発達について説明できたと思います。これまでのことについて何か質問や意見などありますか？

学生：（沈黙。下を向いてプリントと本を見ている）

シーリィ博士：分かりましたか？何か分からない点がありますか？

学生：（沈黙）

シーリィ博士：それではもう一度まとめを述べてみましょう。

（5分後）

シーリィ博士：さて，これで分かりましたか？何か質問は？

学生：（沈黙。教室に気まずい空気が流れる）

シーリィ博士：どうやら，皆さんが理解したかどうかを知るために次の機会にテストをしなければいけないようですね。今日はこれで終わりにしましょう。

ここに見られる日本人学生の態度というか行動は結構日常的に大学の教室においても観察されることでもあり，また留学生からも「私もそう思っていた。一体どうしてなんだ」という質問が出るほど一般的な事例であるため，俎上に乗せ，議論をすることにした。最初これについての日本人学生の答えは，「恥ずかしいから」とか「そんなこともわかってないのかと言われるといやだ」とかといった理由があがって，留学生もそれで一応納得したようなので，その場ではそれ以上の議論にはならず，私もそれ以上追求することはしなかった。

その後西田のその他の場面について同じように議論していったのだが，その日の討論の時間が終わり，部屋に帰って落ちつくと，あの日本人学生の沈黙の問題がどうも気になってきた。そして思い出したのが，上に述べた，常識がないとして人を笑うこと及びその行為の持っている集団維持の機能ということであった。この二つのことを考えあわせたとき，私は「あっ，そうだったのか」と膝をたたいた。日本人学生が沈黙をまもったのは，自分一人だけ他の全員と違うことをすることによって，集団維持装置の犠牲にされるのではないかとい

Hosei University Repository

う深層意識における潜在的な恐れがあったからではないのか。この考えに思い至ったのち，私は次の日の朝にこのことをみんなにどう説明しようかと，その考え方を図式化したり，話を筋を何回も反芻したりしているうちに，窓の外では白々と朝が明けてしまった。考えてみると，それほど大した思いつきではないかもしれないが，そのときは日本人の行動を統御している原理の一つを発見したかのように興奮して，大学セミナーハウスの濃い緑の木々の朝もやの中を歩き回り，その興奮を静めようとして何回となく深呼吸を繰り返した。

ある集団の中に「違う」存在，他と「異質な」存在をつくりだすことが，その集団を維持する装置に成り得る，つまりある集団をまもろうとするときに，わざわざその集団の内部に異質な存在をつくりだしてまで集団維持という目的を達しようとするという日本人の行動については，実はすでに指摘されていることなのである。会田雄次は『日本人の意識構造』の中で，日本人の親が子供をまもるときの姿勢に関する考察を通じて，日本人が自分たちの集団をまもるときのいくつかの方法の一つとして内部に敵をつくるのだということを指摘している[8]。

自分が帰属していると思っている集団のみんなから，こいつはみんなとは違う，変なやつだという理由で「笑われ」ることによってその集団から追い出される，追い出されるまではいかなくても一種の「いじめ」にあうことが，あたかも自分の存在意義そのものを抹殺されてしまったかのような気持ちになるのは，自分の帰属集団こそが自分自身を体現しているという発想が日本人の中にあるからである。堺屋太一は『日本とは何か』の中で，「日本人には絶対的正義という観念がなく」「みんなの利益が正義であること」から「仲間はずれが死よりも怖い」という考え方が出てきたこと，つまり「日本人にとっては，みんなの意向，つまり自分の属する集団の意思と見られるものに逆らうことは，恐ろしい死以上に恐ろしい。」のであると指摘している[9]。

みんなから「笑われ」その集団の一員として認められないことは，日本人にとって「死よりもつらい」仕打ちなのである。みんなが知っていることを知らないというただそれだけで，人はその常識を疑われ，笑われ，「いじめ」に遭い，その集団の維持の犠牲にされてしまうのである。

西田のあげた学生の沈黙と同じような場面を直塚もあげている[10]。

Hosei University Repository

東京のある女子大学での出来事である。ある蒸し暑い日に，アメリカ人教師が授業を行っていた。隣りの教室では発音練習が行われていたので，教室の窓は全部しめたまま。しばらく辛抱して授業したが，さすがに暑い。教師は窓際の学生に「窓をあけてもいいですか」（“May I open the window？”）と尋ねた。

当然，「はい。どうぞ」という答えが返ってくるものと期待していたが，その期待は全く裏切られてしまった。その学生はもじもじして何も答えなかった。「こんな簡単な英語がわからないとは思えない」と，アメリカ人教師は怒って，同僚の小林氏にその話を伝えた。

ここでの学生の沈黙に対する直塚の解釈は以下の通りであるが，「みんな」が構成する「集団」から孤立することを恐れているという点で全く共通の解釈であると言えるであろう[4]。

「窓を開けてもいいですか」という簡単な質問に日本人の学生が答えられなかった原因をさぐっていくと，コンセンサス・システムに行きつく。そして，その根底にはコンセンサスが生まれないうちに個人の意見を強力に主張する人を，出しゃばりで身勝手な人とみなす価値観が存在する。

この日本人の価値観は，欧米人のそれとは対照的である。欧米では周囲のおもわくに煩わされずに自分の自分の意見を堂々と述べることは，称賛こそされ，決して非難されることではない。自己主張しようとする人の足を引っぱって，「出しゃばりだ，身勝手だ」と非難することは，かえってその人物の度量のなさを証明することになる。

（中略）

この対立する価値観を，さらに分析してみると，個人の存在証明（アイデンティティ）の仕方の違いにたどりつく。日本人は，グループの中に個人を埋没させ，個人と全体が一体となった形で，自己の存在を証明する。これに対して欧米人は，あくまで個人単位であり，自己主張によって，その存在を証明する。

直塚は，日本人の行動および行動を規制する価値観を欧米のそれと対比することで，日本人の沈黙の意味と理由を説明しようとしているが，我々の合宿での議論にしたがえば，日本人の沈黙に対して違和感を覚えているのは欧米人の

Hosei University Repository

みに限らず，議論に参加した韓国や中国の留学生に共通した感想であったことはここで指摘しておかなければならないであろう。

ともかく，コンパでピエロを演じてくれた学生のお蔭で，ゼミのメンバーは日本人の人間関係の作り方の最も根源的な構造についての洞察を得ることができたわけである[13]。

〈注〉

① 科目設置のコンセプトについては，江村（1994），1993年度のこの科目の運営上の問題点等については，江村（1993）を参照されたい。

② 「一気飲み」については，読売新聞の記事が紹介しているように，ようやくその反社会性が審判を受けることになったが，その是非についてここで議論したいわけではない「一気飲み」に代表される，おそらくは無意識ながら，絶対的な強制力を発揮する社会的な受入れと排除のメカニズム，さらにそのメカニズムを支えている社会的・文化的な背景を解明すること，さらに，そのような形で我々をがんじがらめにしているものを我々自身が引きずりながら，いかに，ここでいうメカニズムや背景が異なる他者と共通の場を構成し得るか，ということのほうに筆者の関心はある。

③ inteligence と intelectual という術語に関する厳密な「意義分析」については稿を改めて論じたい。

④ 宮本（1993） pp.167−170

⑤ 岩田（1985） pp.28−29

⑥ 西田（1989） pp.34−37

⑦ 西田（1989） pp.126−132

⑧ 会田（1972） pp.6−30

⑨ 堺屋（1991） pp.289−291

⑩ 直塚（1980） pp.187−188

⑪ 上掲書 pp.197−198

⑫ 津田（1996） pp.122−129 には，英語話者である教師に対する日本人学生の「沈黙」は日本人の『オリエンタリズム』への批判，つまり，西欧の『音声中心主義』＝『ロゴスの帝国主義（ジャック・デリダ）』といわれるものに対する無自覚な拒絶反応であるという指摘があるが，この津田の観点をも射程に入れた形でこのテーマを提示しなおす準備は今現在筆者にはない。

文　献

会田雄次（1972）『日本人の意識構造』講談社現代新書
岩田龍子（1985）『日本の経営組織』講談社現代新書
江村裕文（1993）「留学生と日本人学生との間で」『韓国留学生新聞』1993.12.31 号 p.6
江村裕文（1994）「「テーマ講座・教養ゼミ」について」『法政』1994.4 pp.18−21
堺屋太一（1991）『日本とは何か』講談社
津田幸男（1996）『侵略する英語　反撃する日本語』PHP 研究所
直塚玲子（1980）『欧米人が沈黙するとき』大修館書店

Hosei University Repository

西田ひろ子（1989）『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店
宮本政於（1993）『お役所の掟』講談社
読売新聞　1996年7月5日付け　社会面「『一気飲み死』刑事告発」
読売新聞　1996年7月7日付け　解説面「『一気飲み死』で刑事告発　酒に甘い社会へ警鐘」